



## がん検診利益と不利益

血液1滴で13種類のがんが見つけられる機器を国立がん研究センターなどのグループが開発し、注目を集めている。がん患者特有の尿のにおいに着目した方法など、他にも多くのがん発見法が報道されているが、効果的かどうかの検証には長い年月が必要だ。現在有効性が確かな検診は自治体が実施する胃（X線、内視鏡）、肺（胸部X線、高度の喫煙者は痰の検査を併用）、大腸（便潜血検査）、乳房（マンモグラフィ）、子宮頸

部（細胞診）の五つ。その他は有効性が定かではない。診断）、放射線被ばく、検診に伴う事故、正しくがんと診断されずにがん発見が遅れることなどが挙げられる。またがん検診は自覚症状がない人が受けると

多く死亡が多いがんに対して、早期発見・早期治療することで死亡リスクを減らすことだ。だががんにもいろいろある。甲状腺がんのように放置してもほとんど死に至らないがんや、いまだに治療法が見つかっていないがんもある。これらを早期に見つけても受診者に利益はない。さらにがん検診には利益の一方で必ず多少の不利益がある。がんがないのに要精密検査となつて不安になる、治療が不要ながんが見つかってしまう（過剰

時間と費用をかけた検証で新たな検診の有効性が確実になれば、厚生労働省の検討会で、市町のがん検診に取り入れるかどうか議論される。それまでは五つのがん検診を受けてほしい。（県民健康センター所長）